



すすむじ

Vol. 6 No. 4

倉敷昆虫同好会

Dec. 1956

目 次

徳川中期における岡山地方の蝶と蜻蛉類	安 江	安 宣	1
奄の口採集記 (西大寺近隣産蝶四報)	赤 枝	一 弘	4
<u>おとしぶみ</u>			5
寒霞溪の採集品	赤 枝	一 弘	5
コサボソヤンマ藁溪に多産	友 野	良 一	5
御津町でヒメアカネ	友 野	良 一	5
Zoraida 属 (ハネナガウヅカ) の二珍種	松 井	俊 公	6
イチモンジセセリの飛翔速度	友 野	良 一	6
福山でアサギマダラ	友 野	良 一	6
藁溪でクロツバメシジミ	若 林	正 史	6
白水隆先生より本会宛に寄贈された論文3篇の紹介	青 野	孝 昭	7
▽ 56年度 本会宛寄贈雑誌紹介			10
新 入 会 員			11
編 集 後 記			11

徳川中期における岡山地方の蝶と蜻蛉類

安江 安宣

8代将軍徳川吉宗の治世、時は享保19年(西歴1734年)、幕府は国内産物調査のため、同年甲寅3月大目付松平左近将監より次の如き通牒が諸侯にたいして発せられた。

此度、丹羽正伯書物編集之儀付、諸国産物俗名並其形、其国々へ承会申儀=可有之候間、正伯尋候へ、申聞候儀、御料へ御代官、私領へ其領主且地頭、並寺社領へ其支配頭ヨリ可被申渡候

以上

幕府医官であった丹羽正伯はさきに元禄年間「庶物類纂」を著して有名な加賀藩の本草学者稲生若水(1667~1715)の門下であり、上記のように幕府が企図したのは当時のいわば大博物誌であった該書の後編を出版するための資料として各地方の産物目録を提出するよう依頼したわけである。だから丹羽正伯がその主任編集官となったことは正に適役であった。白井光太郎博士の名著「日本博物学年表」によると幕府の通牒より2年後の元文元年(西歴1736年)に津山藩では「実作国津山領産物絵図帳」2冊が成ったことが記されているが、備前岡山については同年表になにも記載がない。かつて昭和24年9月、ノートルダム清心女子大学の佐藤清明先生が日本昆虫学会中国四国地区第1回例会が大原農研で催されたときに、「中国四国地区における昆虫研究」と題された御講演ならびに同名のプリントにおいて「備前産物帖」がでていることを述べておられ、またこの複製版が昭和10年に桂又三郎氏の編集で出版されているようである。

筆者は最近池田藩から幕府に提出された「産物帳」の原本を池田家より岡山大学に寄贈された「池田家文庫」によってみる事ができたので、今から凡そ220年前の岡山地方の昆虫相をしのぶ意味において、そのうちの蝶と蜻蛉類について若干紹介してみよう。原著は「産物帳」と記された和綴4冊からなっており、その前書きによれば

享保廿一年丙辰三月六日国産録成ル大久保右衛門丹羽正伯=持参正伯之ヲ嘉賞ス

とある。享保21年は元文元年(西歴1736年)であるから津山藩の産物帳と同年に完成したわけである。因みにこの翌年には西欧においてリンネの“Systema Naturae”が公にされた近代生物学にとって忘れることのできない記念すべき年でもある。

さてこの産物帖の正式の書名は「備前国備中国之内領内産物絵図帳」であって、うち3冊は極彩色内紙の鳥獣樹木草本魚介類の見事な図鑑である。しかし吾人にとって残念なことは昆虫の原色図が少なく、キリギリス、バッタなどの直翅目のものが数種画れているにすぎない。ただ筆者にとって興味深いのはコクメウ *Calandra oryzae* L. が^{ツミ}蝼蛄という名称のもとで原色原寸大に正確に画れて

おり「米穀ノ中ニ牛スル虫ナリ又ヨナムシト云」と説明してある。

「産物帳」第4冊目の産物目録のなかの「虫多類」の項に「蝶之部」7種、「蜻蛉之部」10種の名があげられている。これは蛇足であるが虫多なる字句は今では甚だ見慣れないものであるが、貝原益軒著すところの「和爾雅」巻6、虫之門第17項をみると次のように註釈している。「虫 爾雅云、有足謂之虫、無足謂之ムシ」

所謂「備前産物帳」にのっている間隔の蝶蜻蛉類を逐次しると

蝶之部

コダヘ
鳳蝶

黄蝶

小てふ

くろてふ

白てふ

おこりてふ

蒼てふ

蜻蛉之部

アカ トンボ
赤 卒

盆とんほう
コナヤ トンボ
紺 蒼

川原とんほう

ひとんほう

めくらとんほう

小草とんほう

やんまとんほう

さるとんほう

牛やんま

こゝに掲げた昆虫名が現在のどの種類に該当するものであるかは浅学なる筆者の到底なしうところではないが、蝶の部で「おこりてふ」という名があげてある。おこりとは昔わが国の所々に地方病的に流行していたマブリアの如き間歇熱のことを指すものであって、蝶をとると病気に罹るといふ迷信が当時行われていたところからきており、このような伝承話はさらに廻って堤中納言物語にもものっている。

件の「おこりてふ」については古い昆虫世界6巻2号(明治35年)に静岡在の神村氏が「昆虫漫

筆」なる文章のなかで遠江地方ではアゲハチヨウ、カラスアゲハ、ヒオドシチヨウ、ルリクテハなどが一般にオコリチヨウとして恐れられていると記している。岡山地方でも現に子供仲間の方言としてアゲハのことを斯くいうているようである。

話が横道にそれてしまって申し訳ないが「備前産物帳」蝶、蜻蛉之部とは別項となつて、このほかに「せせり」、「あまんじやく」の名前があげてある。前者は説明の要もないが、当時ではセセリチヨウ科のものは蝶類とは認めてもらえなかつたものとみえる。後者の名がまた問題であり、いまではこれは天邪鬼とか「つむじまがり、世のすねもの」の意であることは周知のとおりであるが、これが昆虫類のなかに入っているのには驚いた。けれども念のため平凡社の大百科辞典第1巻をみると次の説明がある。

アマノサグメ

「日本書紀に見える天探女からでたとするのが通説である。(中略)民間伝承の伝説や昔話のアマンジャクは人間生活に害を与える妖精または巨人などとして表わされている。……」

また大槻文彦の大言海第1巻には上記の由来のほかに「地虫ヂムシの異名」とあり、同書の袖珍版である言海ではさらに詳しく次の記載がある。

「虫の名地上に1分許の穴を作りて棲む燈心を油に浸して入るれば付きて出づ長さ1寸許黄白色にて首は赤黒し形むかでの如く背に2つの封ありて^ト駱駝の如し1名ニフダウムシ、ヂムシ」

要するにこの「あまんじやく」は今日の金龜子類の幼虫をさすものであって、鱗類ではない。ところが昆虫界10巻105号(昭和17年)に種村鴻氏が「あまのじやく」なる表題のもとに茨城県笠間地方ではアゲハまたはキアゲハの蛹を指す方言として現在でも行われ、

「あまのじやく じやく なせしぼられた トトがないとて ないて しぼられた」

というわらべ唄まであるそうである。これから考えると「備前産物帳」昆虫の部に掲げられている220年前の「あまんじやく」は果して何物をさすのであろうか?

つぎは蜻蛉之部にのっているトンボであるが、これが考証については幸いにして此書とはほぼ同時期の正徳3年(西暦1713年)に世に出た寺島良安の有名な「倭漢三才図会」の昆虫について松村松年先生が雑誌「本草」12号(昭和8年)のなかで解説しておられるのを引用すれば、赤卒はアカネ類を指すことは勿論であるが、そのなかでもアキアカネではあるまいかとするされている。紺紫は松村先生はチヨウトンボ————と推察されてるが、1説にはオオシオカラトンボ————だという人もある。盆とんほうは岡山地方ではお盆の頃に多くでる意味かノシメトンボ————を指す方言のようである。自余のものについては筆者未熟のためこれを推定する能力のないことをのべて筆をおかざるを得ないが、この中には今日の蜻蛉目以外のもの例えば脈翅目に属するのがあげてあるのではなからうか? 事実明治18年文部省刊の中等教科書「動物通解」をみると、脈翅類の説明

として「蜻蛉、蜉蝣、ウスバカゲロウ、トビケラ、クサカゲロウの類是れなり」とある。尤も此書の昆虫類に関することは佐々木忠次郎先生の筆になるものらしい。

最後に上野益三博士の「日本博物学史」、「日本生物学の歴史」には全般的に負うところあったことを記して敬意を表したい。

竜の口採集記（西大寺近隣産蝶四報）

赤枝 一弘

本年は竜の口へ毎月一回登る車にし4月は15日、5月は6日、そして6月17日に前年からの宿願であるヒヨウモンとゼフィルス求めて登った。当日は曇りでしかも途中から雨が降り、雨やどりをしてそれから再び採り始めると云う悪条件であったが登りがけに未記録のウラナミジヤノメを採り率先よい出発をした。所が突然雨が降り出し又出発点へ引き返し雨やどりをし再び出発すると今度はこれ又未記録のウラナミアカシジミを採った。オオシオカラ？の♀を採ったりしてずんずん登りクスギの木をかたっぱしからたゞくが雨水がボクボクと落ちて来るだけで他のゼフィルスは全々あられぬ。アザミの花はたくさん咲いているがヒヨウモン類は全々いない。アザミで一頭へのりグロチヤバネを採ったが未だ時期が早いのか昨年23日にあれほどいたのが一頭だけで他にいない。頂上付近で再びウラナミジヤノメを採り頂上へ着く。頂上こそはと期待したヒヨウモン類はこゝでも全々居ない。こゝでアカシジミを採り逃がす。頂上ではミズイロオナガは多いが他のゼフィルスはほとんどいない。
*「ウラナミアカはアカに比較して産地は局地的だが産地に於てはいずれの地でも多産」と言うについに最後まで見かけなかった。今年はテングテヨウもないなと思いながら頂上の北側になつた。こゝからは旭川、その向うはるかに金山をのぞみ見はらしがよい。飛んで来たキアゲハを採ったが破損個体なので逃がす。続いてクロアゲハを採ったがこれ又破損、ちょっと場所を変えてアゲハ類を待っていると大きい黒い蝶がヒラヒラと飛んで来た。黄色い紋があざやかに見える。あっモンキアゲハと思うと夢中で網をふった。かすかに網にあたったが逃がした。きつと帰って来ると思い待っていたら案のじよう帰って来た。しかし又も逃がした。そろそろ天候はあやしくなり風がビュービューと吹く、雨は今にも降りそうだ。モンキを採るまでは断じて帰らぬぞと思い頂上を一周して帰って見るとしようこりもなく又あらわれている。今度こそと振る。手ごたえありと思つたが又も逃げられていた。ただ網の中に羽の破片が入っていた。今度逃がしたらどうしても降りねばいけないと思つて最後の願いを待って待つとまた現われた。パッと網を振る、蝶は草むらの中へ落ちる。それを夢
*「日本の蝶」

中でおさえた。おかげで大分破損していたがとにかく西大寺~~1~~のモンキを採った。倉敷に於ても6月の記録は少いと云う。それなら以後期待出来るかも知れない。後はいそいで帰路についたにもかゝらず雨が降り大分ぬれたが楽しい一日だった。

西 大 寺 近 隣 迫 加

- 57 *Nymphalis xanthomelas japonica* Stichel ヒオドシチョウ 1956. 4. 6. 金山
 58 *Japonica saepistriata* Hewitson ウラナミアカシジミ 1956. 6. 17. 竜の口
 59 *Ypthima motschulskyi* Bremer et Grey ウラナミジャノメ 1956. 6. 17. 竜の口
 60 *Dapilio heleous nicconicolens* Butler モンキアゲハ 1956. 6. 17. 竜の口

第一回の私の報告で採集を予想した蝶でクロヒカゲだけ残った。竜の口の他の採集品(ツツゼミヘリグロチャバネ、ウラナミジャノメ)等から推して採れそうであるが気をつけているが未だ居ない倉敷産68種中西大寺未記録の蝶はウスイロオナガ、ウラジロミドリ、ミドリ、ミドリヒヨウモン、クモガタヒヨウモン、ウラギンスジヒヨウモン、スミナガシ、クロヒカゲの8種である。

お と し ぶ み

寒 霞 溪 の 採 集 品

小豆島の寒霞溪へ一通り登ってすぐおりた。落着いて採集出来なかったし珍しいものも居なかった。クマゼミ、ミンミン、が多く蝶はホシミスジ、ヘリグロチャバネが多かった。他ウラナミジャノメ、ジャコウアゲハを各1頭採集した。3. 8. 1956.

(赤 松 一 弘)

コシボソヤンマ 寒霞溪に多産

1956. Ⅷ - 5 筆者は青野孝昭氏と絵社市の寒霞溪に出掛けた。溪流(楨谷川)上を飛行中のコシボソヤンマ *Boyeria maclachlani* Selys を多数見掛け3頭(2♂ 1♀)を採集した。

本種は安東瑞夫氏の目録によると県北部には少ない様であるが県南には比較的普通に産するのではないかと思う。

(友 野 良 一)

御 津 町 で ヒ メ ア カ ネ

IX
 1956. Ⅷ - 4 御津郡御津町紙工に出かけた。山中の道端でアカネ類を多数採集したが、帰って調べたところ比較的少ないとされているヒメアカネ *Sympetrum parvulum* Baer

rtenef 1♂が発見出来た。なお同日、同町念川でオナガサナエ 1♀を採集、コシボソヤンマ 1頭を目撃した。

(友野 良一)

Zoraida 属 (ハネナガウシカ)

の二珍種

1. Zoraida Pterophoroides W-ESTWOOD マエクロハネナガウシカ

Zoraida 属のものに非常に前翅が長く、美しい種類であり、亦触角第2節は非常に大きくて一見『角』の様な感じを受ける。先日(30/Ⅹ・56)御津郡建部村にて採集を試みた際にもかかわらずネットに飛来した本種を得たが次種と共に相当稀な種の由である。特徴は触角第2節が大きく棒状で、粒状突起が多く、鮮黄色。脚、体下面は淡黄、体上面は暗褐色、体長6.5mm。前翅長14.5mmで前縁は全長にわたって黒褐色を呈す。

2. Z. kuwayamae MATSUMURA (クワヤマハネナガウシカ)

20/VII, 1956、大山にてピーティング採集中たまたま、目にとまったので標本とし放置していたが前種を得て調べたところ本種と判明したが、共に稀種である由。特徴は前種と同様触角第二節膨大、黒褐色で前種より長い。脚、体下面は黄褐色、腹部は黒色、体長6.5mm。前翅長18mm、前縁は全長に互り暗黒色で、その後縁は凹凸が多い。従って前種とは明らかに識別出来る。以上参考迄に記した次第である。

(松井 俊公)

イチモンジセセリの飛 速度

1956年9月上旬のある日の昼過ぎ筆者は岡山市内を軽自動二輪車で走っていた。丁度その時道路上を飛んでいたイチモンジセセリを見つけたので約20メートルの距離を並行して走ってみたところ、速度計は時速約20キロを示した。なお当日は大体晴の天気で微風であった。

(友野 良一)

福山でアサギマダラ

筆者は1956. Ⅹ-28 倉敷市福山山頂で飛翔中のアサギマダラ 1♀を採集した。

(友野 良一)

豪溪でクロツバメシジミ

9月23日、ゴウケイでクロツバメシジミを採集した。大和へぬける道上、日ノ出旅館を500mばかり北上したへんで採集した。まだ羽化して間のない物とみられ、表の黒が粉をふいたようだった。

水野氏も豪溪が総社市附近ではクロツバメの発見可能の最も有力な地点と見て何度も捜したらしいが取れなかったようだ。

近ごろゴウケイはムラサキツバメなど採集されておもしろくなってきているので、又改ためて「総社市附近の蝶」についてまとめようと思っている。

(若林 正史)

YYYYYYYYYYYYYYYYYYYY

白水隆先生より本会宛に寄贈

された論文3篇の紹介

青野 孝昭

白水隆先生が極東の蝶類学者として世界的権威者であられることは、日本の誇りでもあるが、この度、お送りした「すずむし」の返礼として、先生は、3篇の貴重な論文を本会宛に御恵送下さいました。更に今後御発表になる論文別冊も、本会宛に御恵与下さるとの有難いお言葉を頂きましたので、ここに御紹介して、感謝の意を表したいと思います。

この度、頂いた3篇の論文はいずれも *Sieboldia*, Vol. 1, No. 4 (Fukuoka 1956) に載せられたもので、最新の論文ばかり、専門家は勿論のこと、我々アマチュアも見逃がし得ない知見が発表されていますので、夫々について、簡単に紹介の労をとらせて頂きます。

1. A GENERIC REVISION AND THE PHYLOGENY OF THE TRIBE

THECLINI (LEPIDOPTERA; LYCAENIDAE) TAKASHI SHIROZU and
HIDEHO YAMAMOTO

Sieboldia, 1 (4), P329~421, Pl. 35~85 (英文)

最近、分類の命名という問題が非常にくわしく研究され出したが、蝶はその点ずっと遅れ、一番肝心の属の検討などもやられていない。それで、日本でも最近は本格的分類がやかましく言われ出し、例えば地方的亜種というような細かい点はずい分詳しく調べられているが、もっと大きな属の分け方なども再整理しようという機運にきているといったことが江崎博士によりかつて述べられていたが、この論文はその機運の中から生れた巨木だとも言えよう。白水・山本両氏がこの論文で取り上げられたミドリシジミ族に関しては、江崎博士(1934-38)の論文シリーズの発表以来、二三の著者により、極東産のものについての分類が著しく進捗されてきた。なかんずく、柴谷、伊藤両氏(1942)による日本、朝鮮及び台湾産 *Zephyrus* の10属分割、柴谷(1946)及び白水・村山両氏(1951)による台湾産2属の新属創設等の業績が大きい。属の類縁関係を探る為に重要と見られる台湾及び朝鮮産の二三の稀種は未研究の儘残され、その上中国から北部インドに見られる大多数のミドリシジミ類について属の分類を取扱った論文発表はなく、それらは単に *Zephyrus* 或は *Thecla* として知られて来たに過ぎない。現代分類学の常識に於て、それらが多数の異なる属に分割されねばならぬことは決定的であり、又それらの属の配列が改正されねばならぬことも疑いもない。

こゝに於て、白水・山本両氏はこの論文に於て、全世界のミドリシジミ族の属の分類改正を試みられ、系統発生的結論に達到達せられている。それには、下唇鬚、翅斑及び雄交尾器の様にかねて言及された器官につけ加えて、新たな雌交尾器及び第8腹節の徹底的研究に基礎が置かれている。

論文の最初の部分には族の特徴（カラスシジミ族及びムラサキシジミ族との比較を含む）及び属の改正が提出され、その中に各種に亘っての構造上の特徴記載が含まれている。この部分で記載された7属と1種は、学会新発表のものである。この族の記載の部分で地理的分布について、この族の大多数の種（約93種）が極東から北部インドにかけて分布し、ヨーロッパに3種、北アメリカに2種、マレイ半島、ジャワ及びボルネオに各1種と述べられている点には強く興味をひかれる。新属も含めて、ミドリシジミ族は新たに26属に分割再配列され、便利な属の検索が与えられ、続いて各属各種の記載に移る。ここで我々に馴染みの深い日本産ミドリシジミのうち、属名の変えられたもののみ捨てて見ると次の様である。

	旧	新
ウラキシジミ	Coreana	Ussuriana
ムモンアカシジミ	Thecla	Shirozua
メスアカミドリシジミ	Neozephyrus	Chrysozephyrus
アノノミドリシジミ	Neozephyrus	Chrysozephyrus
ヒサマツミドリシジミ	Neozephyrus	Chrysozephyrus
ヤクシマミドリシジミ	Neozephyrus	Chrysozephyrus
キリシマミドリシジミ		
フジミドリシジミ	Favonius	Quercusia

種の記載には、徹底的に研究された各器官の見事な附図が一括してPl. 35~85 に与えられ、こゝでもこの論文が大変な労作であることが痛感される。

二番目の部分では属の類縁関係及び原始的な祖先からの発展の過程が推論され、完璧だろうと思われる立派な系統樹が作製されている。今ここに原著より系統樹を転写すると附図の通りであり、発展の過程に三段階が認められている。即ち、

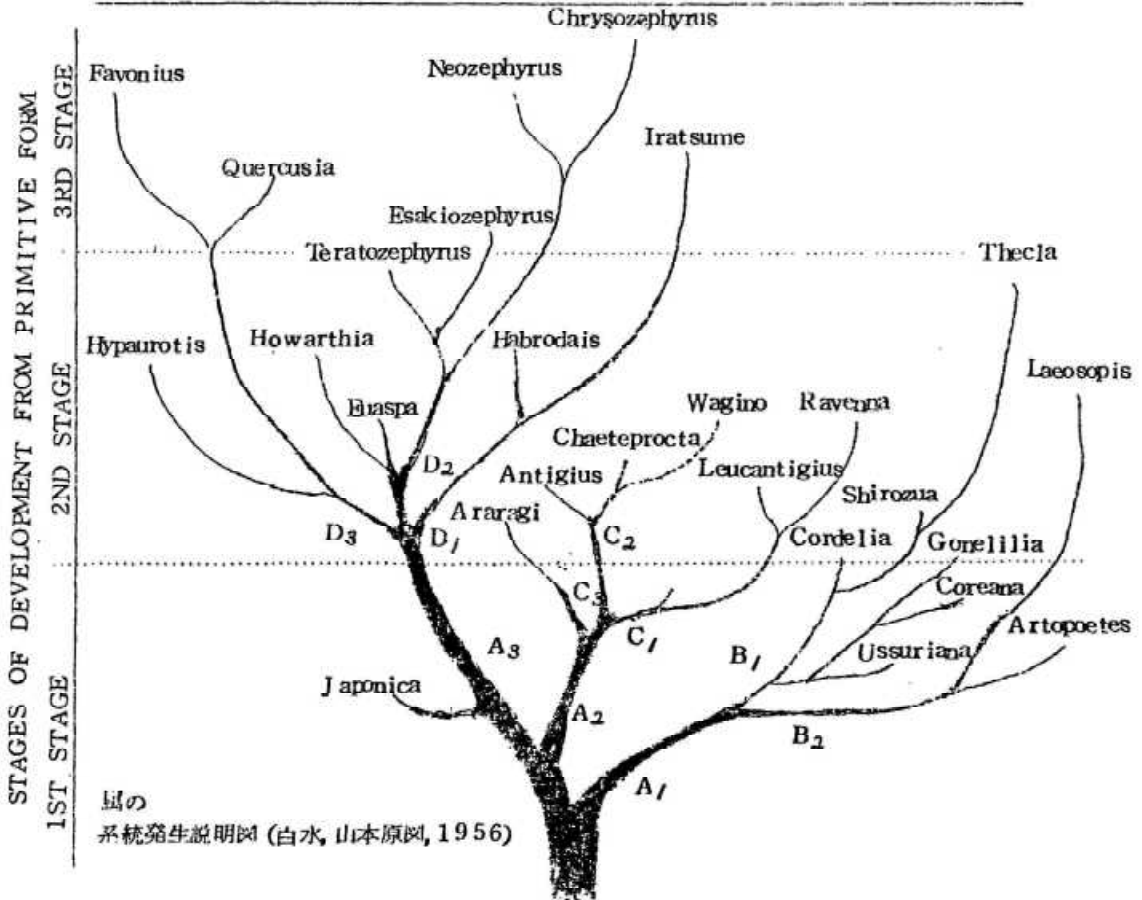
第1段階：最も原始的な特徴はこの段階に保持される；性的二形はあられず、複眼は両性共小さく殆んど裸出、前肢の羽節は両性共分節化され、そして、翅色及び翅斑も雌雄殆んど同一である。

第2段階：明瞭な性的二形が前肢の羽節に獲得される、即ち雌に於ては羽節が筒状管様になり、雄に於ては分節された状態が保持されている。複眼は両性共殆んど同一で、殆んど裸出しているか、わずかに毛を生じているかである。翅斑も又雌雄殆んど同一である。

第3段階：最も進んだ特徴はこの段階で獲得されている。明瞭な性的二形は頭部の構造及び翅の色彩に高度に発達している。

最後に、この論文で言及された全ての種及び亜種の名原記載文献のリスト及び参考文献が挙げられているが、それも又非常に参考になる点が多い。

なお、新しい体系のもとに、如何なる属に所属さるべきか、材料の得られなかつたが為に残された15種についても、早い時期にそれらが皆解決される様祈つてこの論文紹介の筆をおきたい。



2. 奄美大島産テングテヨウの一新亜種
白水 隆

Sieboldia, 1 (4) P. 427~430, PI. 86

先年、日本に復帰し、日本の最南端となつた奄美大島に産するテングテヨウが、日本本土産の亜種 (*Libythea celtis celtoides* Frustorfer) 及び台湾産の亜種 (*L. celtis formosana* Frustorfer) より區別され、新亜種 (*L. celtis anamiana* Shir-ozu) として記載されている。

新亜種は日本本土産の亜種に最も良く似ているが、區別点の要点のみを紹介すると、次の3点があげられている。

1. 本亜種は日本本土産の亜種よりは一般に大形 (亜種 *celtoides* において前 長さ 21-25 mm、♀ 23-26 mm に対し、本亜種において 24-27 mm、♀ 24-28 mm) 。

2. 表の、白斑は大形で一般により明るい。

8. 前翅中室前縁の黒条は *celtoides* では全く橙色鱗をまじえないが、本亜種では多少とも橙
色鱗をまじえることが普通で、これは♀に著しい。

なお、新亜種決定に関連して検討された屋久島のテングチョウ標本は日本本土産の亜種と区別出来
ず、屋久島は、亜種 *celtoides* の分布南限を示すものであろうとされている。

3. 日本におけるクッペンルリシジミの発見

白水 隆

Sieboldia, 1 (4), P. 423~426

従来日本から知られているルリシジミ属 (*Celastrina*) の種類は4種2亜種であったが、白
水氏により、日本より未知の本属の1種、*Celastrina dilecta* Mooreクッペンルリシジ
ミが九州より見出しされ、その発見の概要が報告されている。なお、それと共に、

将来の本種の再発見のため採集者の注意すべきルリシジミとの外観上の区別の要点が述べられ、南
九州のみならず、四国、紀伊半島あたりについても本種再発見の可能性のあることが指摘されてい
るので、ここにもその要点を紹介してみる。

1. 翅表面外縁黒線はルリシジミに較べて一般に細い。
2. 後翅第5、6室、或は更に前翅第2、3室の基部にも白斑、或は白色を帯びた部分が見られる。
3. 前翅裏面中央紋列はルリシジミに較べてより外縁に近く位置し、その形は細線状に近く、ルリ
シジミのようにだ円~円形ではない。
4. 後翅裏面第1C室の二小斑は必ず結合して「く」字状を呈する。

ここで報告されたクッペンルリシジミは1955年7月10日に霧島山で福田晴夫氏により採集さ
れたものであるが、意外なところで再発見されないとも限らない。採集家の楽しみが又増えた様な気
がする。

(文責 青野)

1956年度 本会宛寄贈雑誌紹介

本年、他同好会より本会宛に寄贈を受けた雑誌は、徳島市に事務所を持つ昆虫団体研究会よりの昆
虫科学2及び3の2冊のみで、いささか、淋しいが、主内容を紹介して、皆様の便に供したいと思ひ
ます。

① 昆虫科学2：1956，昆虫団体研究会 (44頁)

南アルプス白根山偵察記，溝口重夫；附記南アルプス白根山附近で採集された昆虫。溝口修；四
国地方四果の蝶相の比較，西岡増夫；徳島県の蝶相に関する一考察，日浦勇；

② 昆虫科学3：1956，昆虫団体研究会 (44頁)

蝶の食草とその分布(その1) ミカドアゲハ, 伊延敏行; 日本列島の最近の地史(徳島地方の蝶相成因の考察に不可欠な地史概要), 溝口修; ソ同盟科学アカデミー動物学研究所編「森林有害動物便覧」, 溝口修; 徳島県産蝶類についての過去の業績1, 日浦勇

編 集 後 記

1956年度も本号を以ってめでたく完了。「すずむし」も年間4号の発行のみでは何か物足りない感があるが、来年度以後に於ける発展への橋渡しとして、本年度の会の歩みは決して退行的なものではなかったと思われる。紙上総会形式による会則の改正は来年度よりの会の運営を円滑にする為には極めて重要であったろうし、3回に亘って催された採集会の成果も見逃がせない。次々と取り上げてゆけば際限がないが、何よりも心強いことは、本年に至って会員の間に虫に対する関心が情熱的に又高められたことであろう。そのことが来たる年への希望を募らせる。「すずむし」の発行の面でも、年4回発行が決められた今、私達は内容の充実、ページ数の拡大へ努力を結集してゆきたいものと思ふ。

本号の編集は学期末整理に忙殺されているO氏宅を借りて致しました。諸氏の協力で本号の誕生したことを嬉しく思います。皆様良い新年をお迎えになりますよう。(T・A記)

理化学器機 光学器機
 度量衡 計量器 採集用具
 平 田 光 学 器 機 店

岡山市中之町 二七

電話 ②局 5474

理
化
学
器
機
テ
ー
プ
コ
ー
ダ
ー

生物・地学標本模型

昆虫採集用具

テレビ・ラジオ・真空管

島津製作所岡山県代理店

サ力工商会

倉敷市栄町(赤木病院西)電話 913番

志賀製品

昆虫・植物採集用具

理化学器機

岡山市西中山下(柳川交叉点東)

長瀬教育堂

電話 4725番

すむし 第6巻第4号

昭和31年12月27日印刷

昭和31年12月28日発行

編集者
発行者

倉敷市住吉町 岡山大学農業生物研究所

害虫部第二研究室内

倉敷昆虫同好会

正誤表

Vol.6 No.1

(頁)	(誤)	(正)
2(2) 1行目	話して	言記して
2行目	SP	SP.
12行目	sylvaticus	sylvaticus
16行目	キマダラ, ヒメキマダラ.	キマダラセセリ.
23行目	草間で	草間は
3(3) 左4行目	No 8	No. 8
左下から8行目	Vol. 7.	Vol. 7.
右12行目	M. ishiharai	M. ishiharai
右下から11行目	科学班	科学班
4(4) 左20行目	ネット振って	ネットを振って
5(5) 左26行目	1グルミ	1グルミ
左下から11行目	No 8	No. 8
左下から5行目	科学班	科学班
6(6) 左16行目	ビーティング	ビーティング
右3行目	カメノコテイトウ	カメノコテントウ
右11行目	捕虫網	捕虫網
7(7) 左9行目	何百燭光	何百燭光
右10行目	アオガムシ	アオガガムシ
右15行目	食若	食弱
下から7行目	TULY	JULY
下から3行目	Vol. XIII, No 2	Vol. XIII, No. 2
8(8) 左下から16行目	風泉	風早
右7行目	ダイセ印刷	ダイソ印刷

Vol.6 No.2

表紙	No 2	No. 2.
2(10) 下から5行目	Gen	Gen.
3(11) 下から13行目	普通種	普通種。
4(12) 17行目	飛ぶ。	飛翔する。
5(13) 左下から3行目	Careana	Coreana
左下から2-1行目	Vol. 7, No. 10	Vol. 7 No. 10
6(14) 左14行目	種物	植物
左下から10行目	種物	植物
右下から5行目	根本	根元
右下から5行目	当り	あたり
7(15) 左14行目	非前に	非常に
左21行目	Vol. 2 No 1	Vol. 2, No. 1
左下から5行目	{むくけ}	{むくけ}
右下から7行目	561	'56
右下から5行目	(Vol. 6 No. 1)	(Vol. 6, No. 1)
右下から1行目	重ねて	合せて
8(16) 左8行目	つ水	す水

〔頁〕
 8 (16) 右1~2行目
 右5行目
 9 (17) 左下から4行目
 左下から2行目
 右8行目
 右下から5行目
 10 (18) 左3行目
Vol.6 No.3
 表紙
 8 (26) 11行目
 10 (28) 11行目
 下から4行目
 11 (29) 13行目
 13行目
 右下から1行目
 12 (30) 左下から12行目
 左下から9行目
 左下から6行目
 左下から5行目
 左下から2行目
 右下から4行目
 13 (31) 左下から2行目
 右10行目
 右11行目
 14 (32) 左14行目
 右6行目
 下から9行目
 下から5行目

Vol.6 No.4
 3 (34) 14行目
 5 (35) 11行目
 左下から2行目
 右下から4行目
 右下から4~5行目
 6 (34) 右1行目
 7 (35) 6行目
 14行目
 8 (36) 7行目
 13行目
 9 (37) 下から10行目
 下から3行目
 下から1行目
 11 (39) 下から2行目

〔誤〕
 Vol.1, No.12 Vol.2, No.7
 総社市東中学校
 Ana x nig....
 A par....
 Aegus lae....
 第4圖
 天牛... 天牛類

 Vol.6
 徐翔翼面
 何故なら
 1956. IX-12.13.14
 阿哲峽
 各1頭づつ
 34°50'
 なほ,
 Piceus
 Curculio
 alboscute Hatus
 るものであるか
 (1907) だから
 金甲虫のミロヘリツクアキムシ
 日本昆虫図鑑
 原色昆虫図鑑
 香嶺部泰次
 (赤松一弘)
 香林と也
 風早共

蝶類
 Dapilio
 赤松一弘
 1956. XI-4.
 出けた。
 飛速度
 論文別冊
 Pl. 35~38
 拾って
 アイノミドリシジミ
 Pl. 86
 前'長
 表の 色斑は
 借りて

〔正〕
 Vol.1, No.12 Vol.2, No.7
 総社市総社東中学校
 Anax nig...
 A. par....
 Aegus lae...
 第4圖
 天牛... 天牛類

 Vol.6
 徐翔翼面
 何故なら
 1956. IX-12.13.14
 阿哲峽
 各1頭づつ
 34°50'
 なほ,
 piceus
 Curculio
 alboscute Hatus
 るものであるか
 (1907) だから
 金甲虫のミロヘリツクアキムシ
 日本昆虫図鑑
 原色昆虫図鑑
 総社市泰次
 (赤松一弘)
 香林と也
 風早知

蝶類類
 Papilio
 赤松一弘
 1956. IX-4
 出かけた。
 飛翔速度
 論文別冊
 Pl. 35~38
 拾って
 アイノミドリシジミ
 Pl. 86
 前'翅長
 翅表の橙色斑は
 借りて